

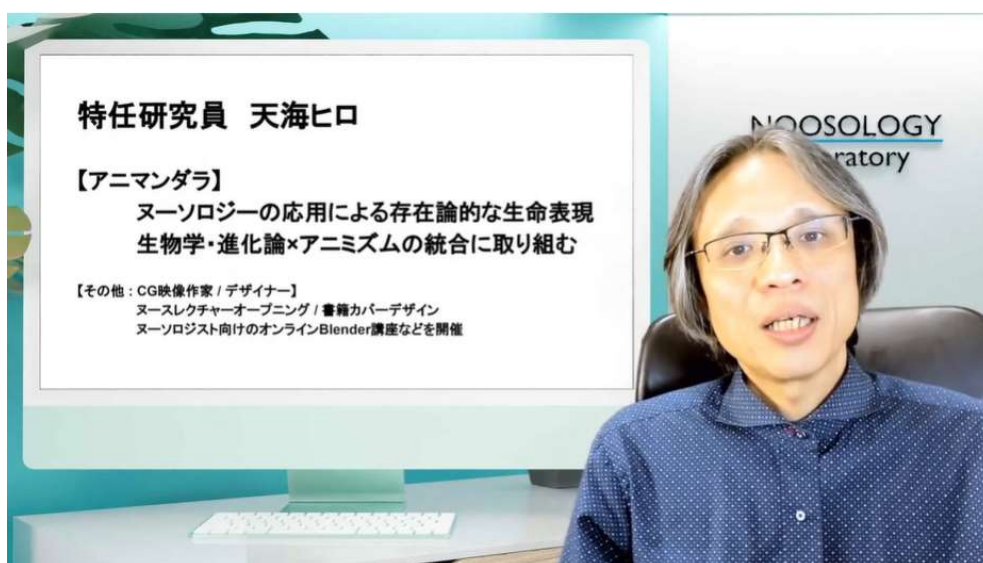
【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#010(天海)(23:20)
「ヌーソロジーで思考する・存在論的生物進化」(2022/07/26 uploaded)

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#010(天海)(23:20)
「ヌーソロジーで思考する・存在論的生物進化」(2022/07/26 uploaded)

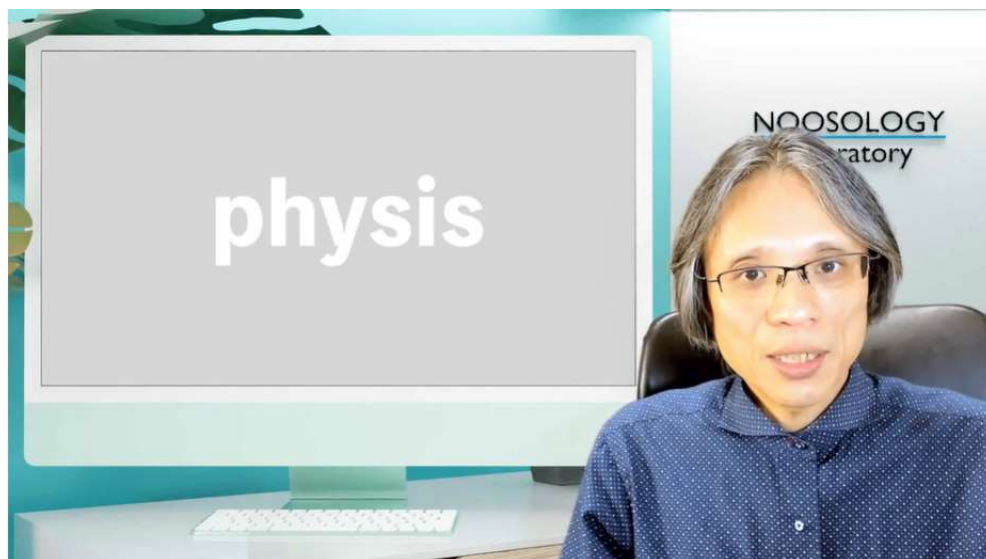


皆様はじめまして。武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所特任研究員の天海ヒロと申します。よろしくお願ひします。

私は生物学や進化論といった科学的自然観とアニミズムと呼ばれる古代の自然観を背景にヌーソロジーを研究しています。アニミズムはわかりやすい例だとネイティブアメリカンの自然観とか、それから日本神道の八百万の神といったものがそれに当たります。







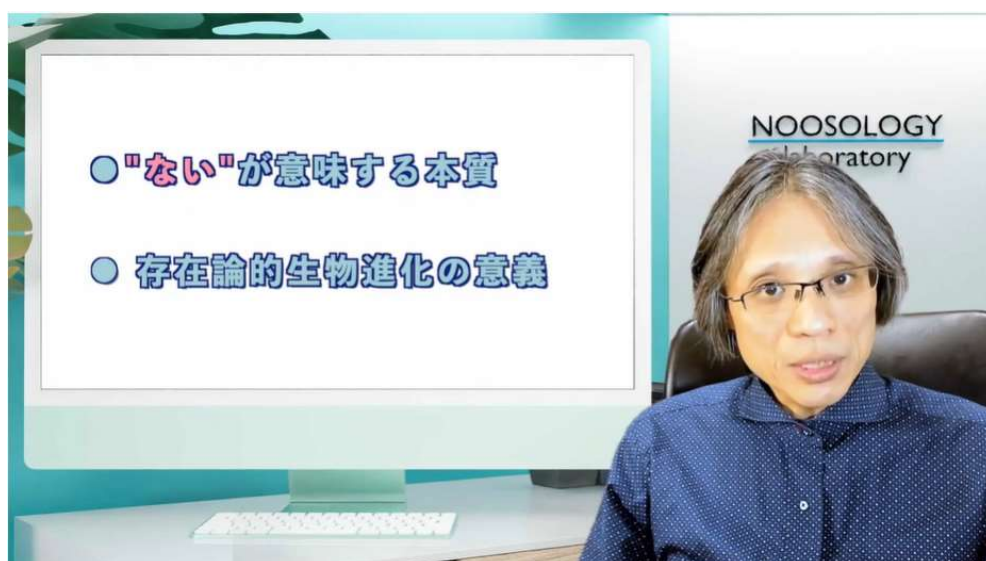
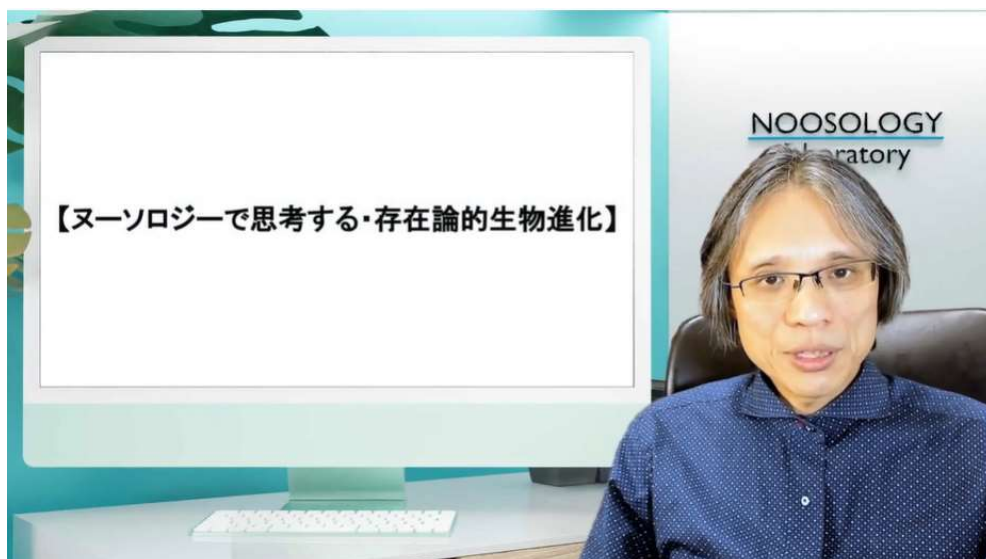
古代のそうした自然と共に生きた人たちの万物に命を見い出す眼差しと、生物学や進化論といったものが一つに重ねることができたならば、近代的な課題を乗り越えた新しい自然観を表現できるのではないかと考えて取り組んでいます。それによって生物をですぬ物質の延長に見なしがちな近代的な思考から生命として命を通してオーガニックに自然とつながった世界観を取り戻せるのではないかと考えています。そうした新しい思想を立ち上げるにあたってヌーソロジーという思想は大変大きな役割をしています。半田所長も当研究所の発表の方で、古代ギリシャのフィシスというお話をされていました。まさにそうした自然観と繋がる、それでいて新しいそんな自然観を模索しています。そうしたことを背景こちらでは皆様にヌーソロジーを掘り下げた研究発表をお伝えしていければと思っていますので、改めましてどうぞよろしくお願い致します。(1:58/23:20)

**Research
Announcements**
#010

ヌーソロジーで思考する・存在論的生物進化

 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

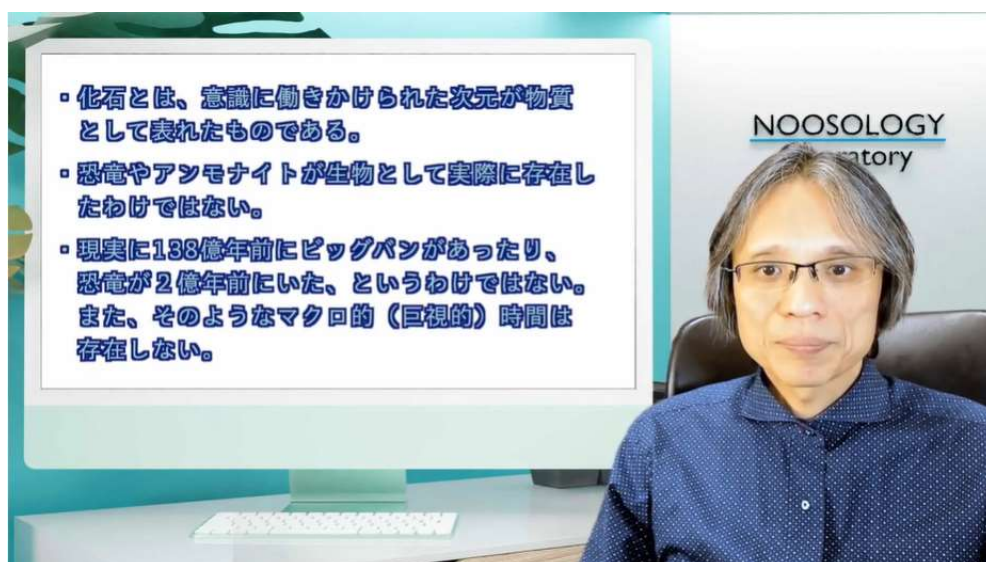
announcer 天海 ヒロ



ヌーソロジーで思考する・存在論的生物進化

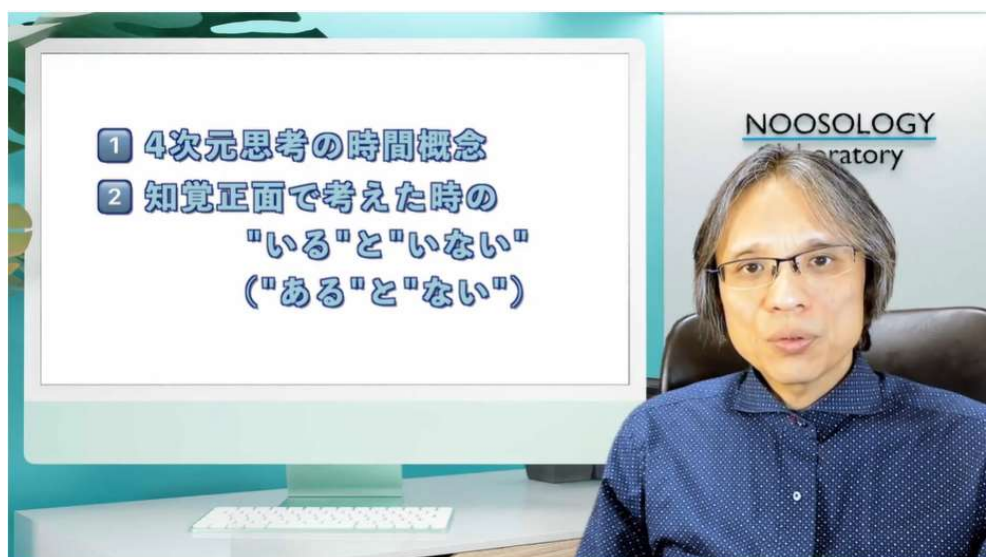
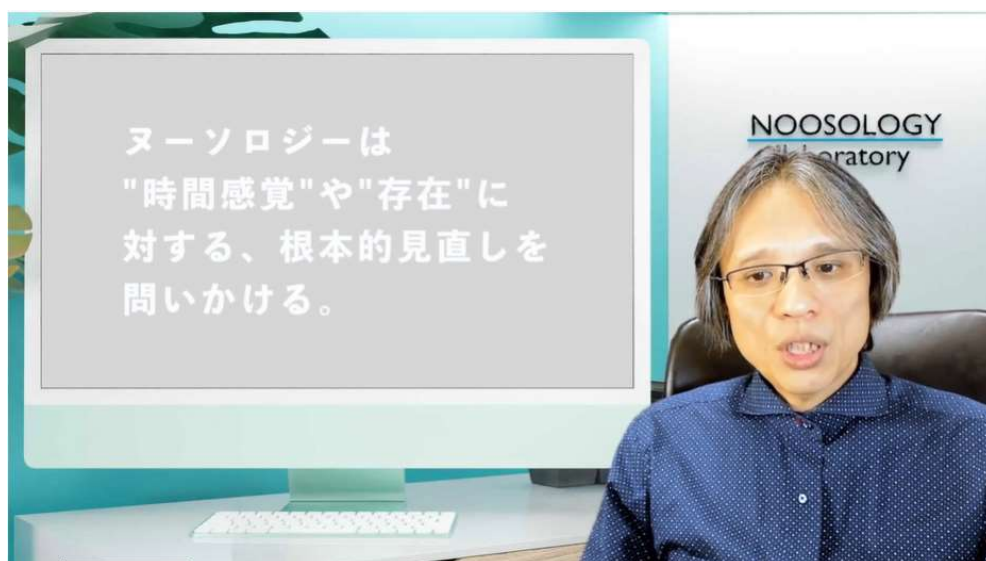
天海 ヒロ

さて、それでは第1回目の発表に入ります。テーマは、ヌーソロジーで思考する存在論的生物進化になります。中には生物進化をなぜヌーソロジーで扱うのか不思議に思う方もいらっしゃるのかもしれませんがね。それはヌーソロジーの大きなテーマである、意識進化と直接繋がるからなんです。ただヌーソロジーを学ばれている方たちの中には、半田所長の発言や書籍等の言及でですね。恐竜やアンモナイトはいなかったという表現や、それから、生物進化にまつわる話題が引っ掛かってしまうなんて方もいらっしゃるのかもしれませんが。そこでまず、最初ということですね。一度こうしたお話を整理してお話しさせて頂ければと思っています。今回の切り口としましては生物進化は”ない”ということの本質と、それから、そこから紐解かれる存在論的生物進化の意義というお話をさせて頂きます。ヌーソロジーでは生物進化をこのように表現し扱っています。



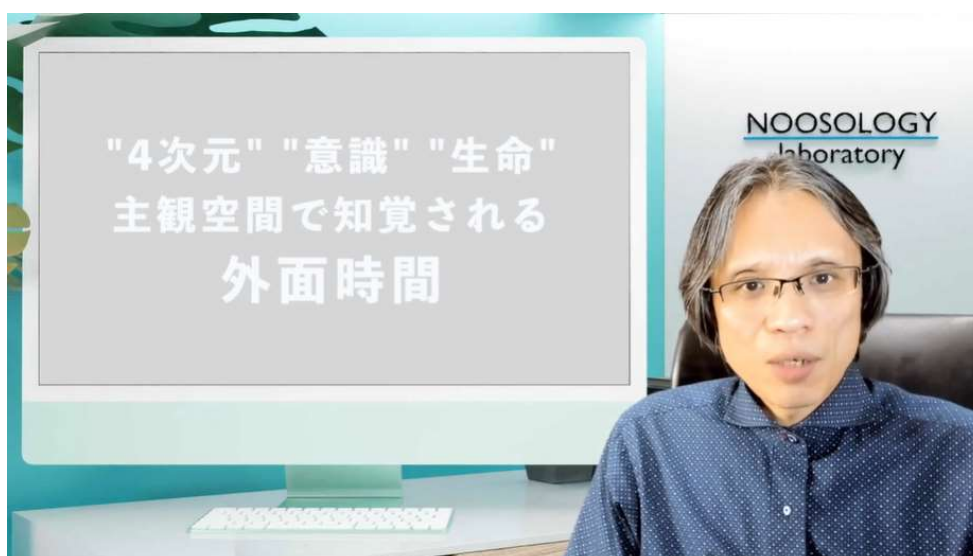
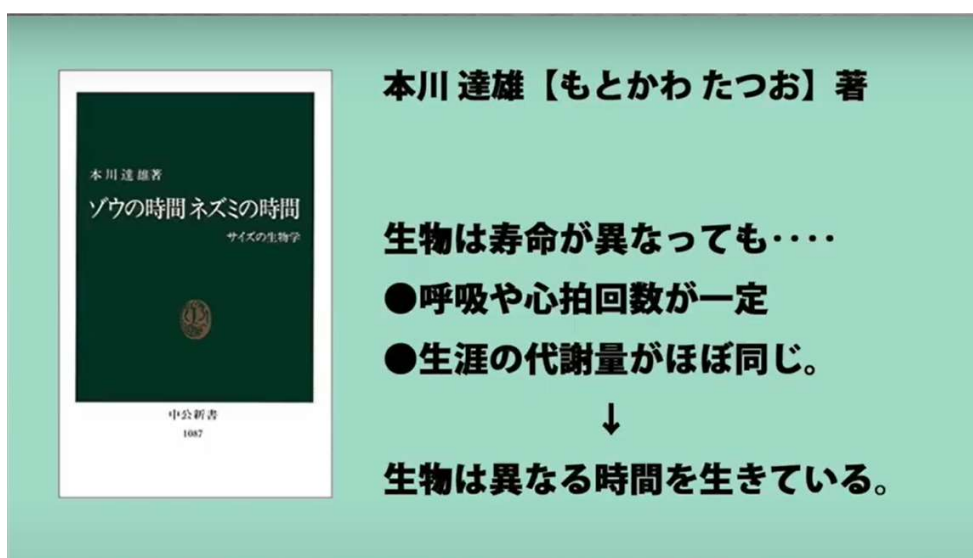
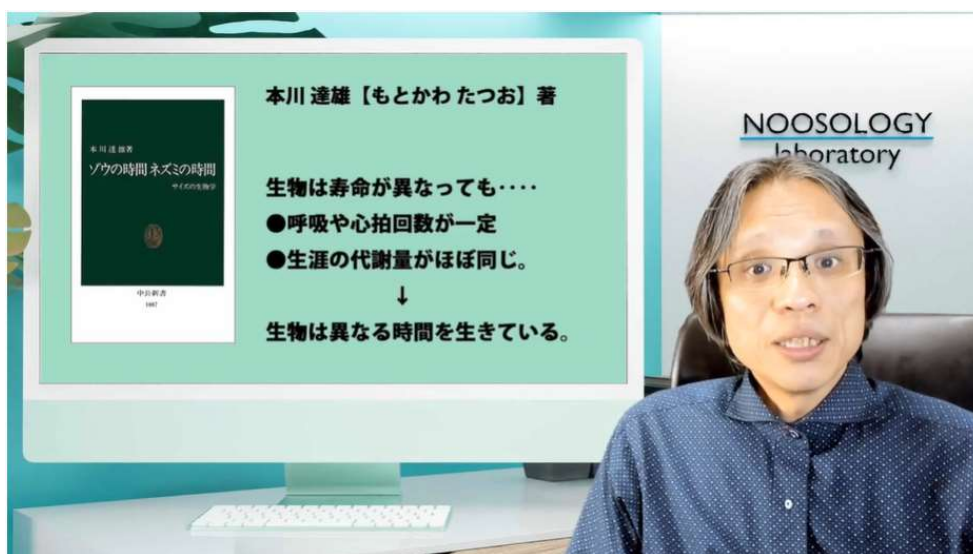
- ・化石とは意識に働きかけられた次元が物質として表れたものである。
- ・恐竜やアンモナイトが生物として実際に存在したわけではない。
- ・現実には 138 億年前に ビッグバンがあったり、恐竜が 2 億年前にいた、というわけではない。そのようなマクロ的(巨視的)時間は存在しない。

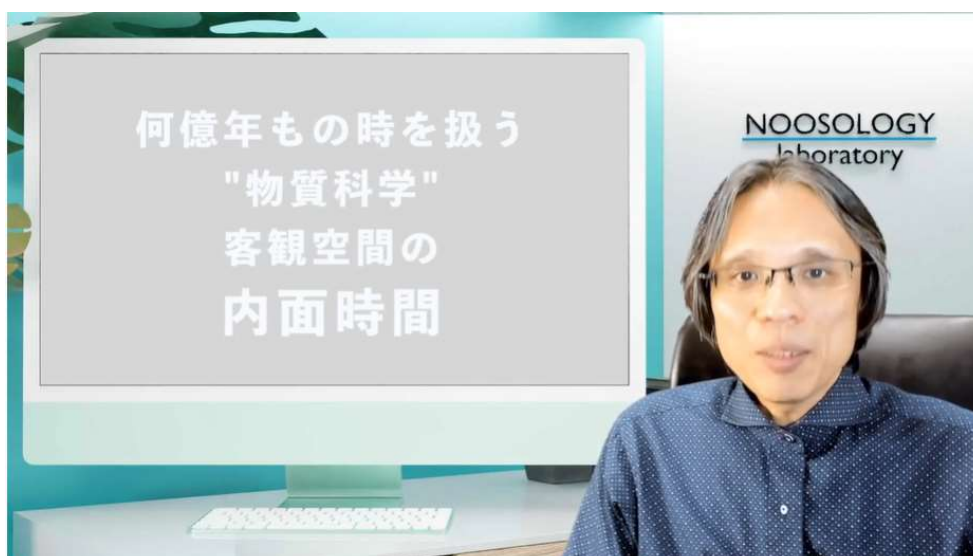
驚くべき話ですよ。まあ、ただセンセーショナルなだけに、額面通りに言葉通りに受け取ってしまうと、言葉だけが一人歩きして、場合によっては誤解を招くなんてこともあるのかもしれませんが。この背景を丁寧に紐解いていくとですね。科学が描写する恐竜や壮大な時間感覚の根本的見直しを、ヌーソロジーは投げかけているのであって、生物進化や恐竜の本質的な存在そのものを否定しているわけではないようなんです。それどころかまあ実際にですね。恐竜や生物進化にまつわる興味深い言及がヌーソロジーにはいくつもあります。でもですね。そうしたら生物進化がない、あるいは、恐竜がないということをどのように考えたらよいのでしょうか。



それを考える上でのですね。ヌーソロジー特有の視点が2つあります。一つは4次元思考における時間概念。そして、もうひとつは知覚正面で考えたときのいるといないです。ヌーソロジーは、ご存知のように日常感覚と異なる4次元思考の時間を扱っています。4次元視座でもでもある外面では、持続に代表されるように時間はシュッとこう一瞬に畳み込まれたり、それからマイナス時間なんかも登場しますよね。このような時間間隔は相対論でも扱われていますが、身近なところでは実は意識なんかもそうじゃないでしょうか。未来や過去に行き来したり伸び縮みしたりします。

他にも本川達雄さんの『ゾウの時間ネズミの時間』などを代表に生物の世界ではですね。寿命が異なっても、呼吸やそれから心臓の鼓動の回数が一定で、それで生涯の代謝量がほぼ同じだということがわかってるんですよ。このことから、生物は種ごとの環世界で異なる時間を生きているということがわかってきています。





4次元・意識・生命、これらは全部ヌーソロジーにおける主観空間で直接知覚された外面時間ということになります。一方、何億年もの時間を扱う物質科学的な時間では、客観空間の内面時間というふうに言えるでしょう。自己も他者も物質も時計によって一律に統べられた時間となっていることがわかります。

外面と内面では、時間の性質が根本的に異なっていて、二つの顔があるんですね。このように慣れ親しんでいる物質科学的な時間は、絶対的な唯一の時間、唯一の真実とは言えないでしょう。特に何億年の壮大なスケールを扱う科学時間は直接計測して確認したり計測検証することができない。まあいわば観念の時間なんですよ。

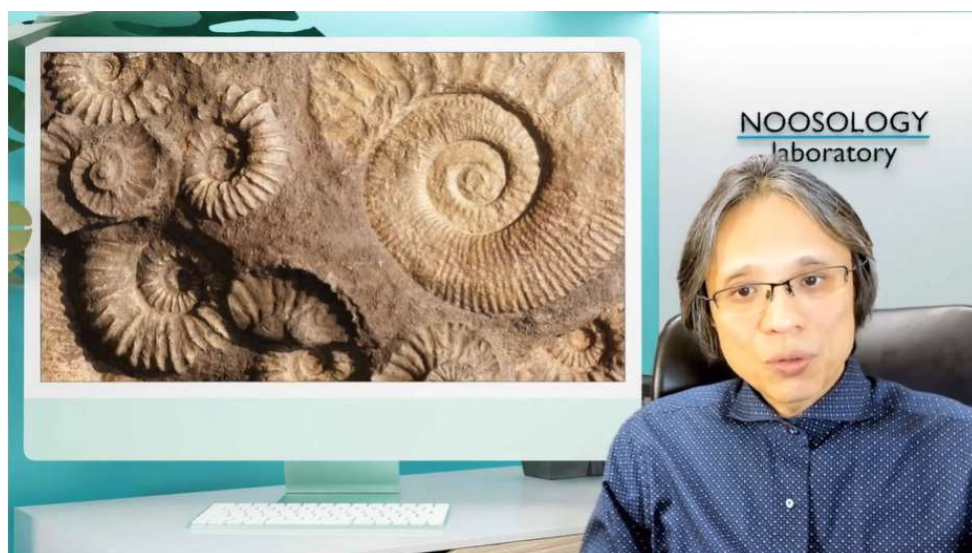
この点がもう1つのポイントとなっている知覚正面に繋がっていきます。進化におけるヌーソロジー的なあるとない、この意味をそのことが浮かび上がらせてくれます。知覚正面は、半田所長が研究発表 No.9 でお話された主観空間のことでもあります。

実は私自身ですね。ヌーソロジーと出会って恐竜がいないという話を初めて聞いた時、そんなに驚きはしませんでした。



というのも、以前から思うことがあったからなんです。生物進化はみなさんご存知のように、化石からそれを古生物だと考えて、いろんな仮説を立て、類推していきます。それから彼らがいつの時代に生きていたのかということは化石の年代測定やそれから分子時計という、複数の生物の遺伝子を比較して、共通の先祖がどのぐらいまで遡れるのかというような、そうした様々な手法を総合的に判断して、解析されるようになっていきます。技術発達に伴い、古生物の世界はより精密に臨場感豊かに描写されるようになってきています。





でもとはいえ、一方でやはりどこまでいっても、これらは断片的な仮説の集合体ということになります。その実態がいつになったらはっきり完全にわかるのかといたら、それはタイムマシンとかがのできない限り永遠にその日は来ないんですね。どこまで行っても仮説です。

そうやって考えたときにですね。恐竜っていうのは実際には生物として存在していたというよりは、人間の科学意識の中の存在なんだなあなんて、ちょっと哲学的なことを考えていました。ヌーソロジーと出会って知覚正面という概念を知ったとき、その意味が私の中では明らかになったような気がしました。恐竜というのは、実際に目の前に見られる日が決して来ません。それらは知覚正面には、つまり、いないのです。つまり、外面に存在していないということになります。

でも、だからと言って、それらは近代思想が生み出した単なる無意味な想像なのかと言うと、どうやらそう単純な話ではないようです。恐竜を想起させた化石の方は、知覚正面の方、つまり、外面に

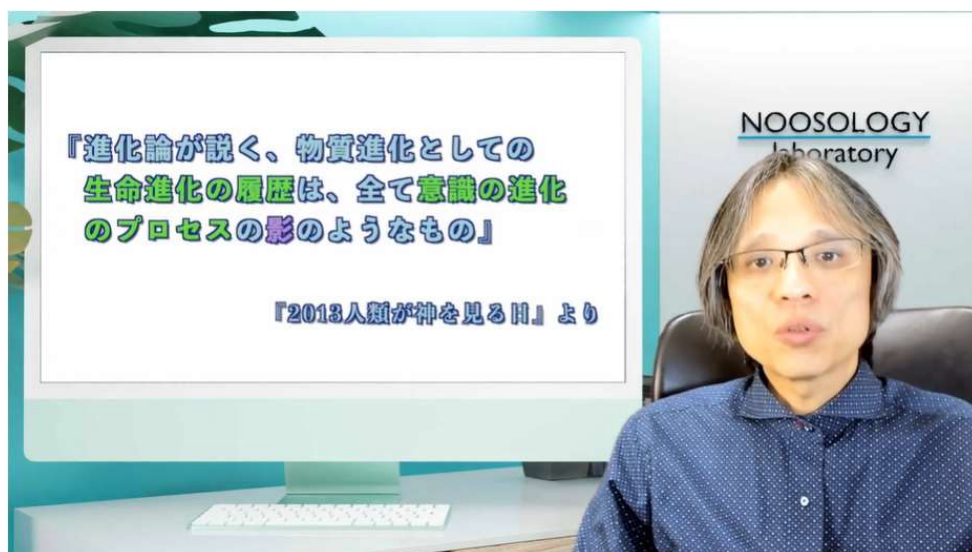
しっかりと存在していますし、既に述べましたが、ヌーソロジーには、それら恐竜や生物進化を前提とする具体的な言及もあるからです。

では、いないけどある、それはどういったことを意味しているのでしょうか。知覚正面の特性を考えれば、恐竜は科学概念が司る幅の世界、内面にだけ存在しているということはわかるでしょう。と同時に、それを内面に生じさせた化石や生物進化の存在論的な本質の方は外面に別の形で隠れているということもできるでしょう。



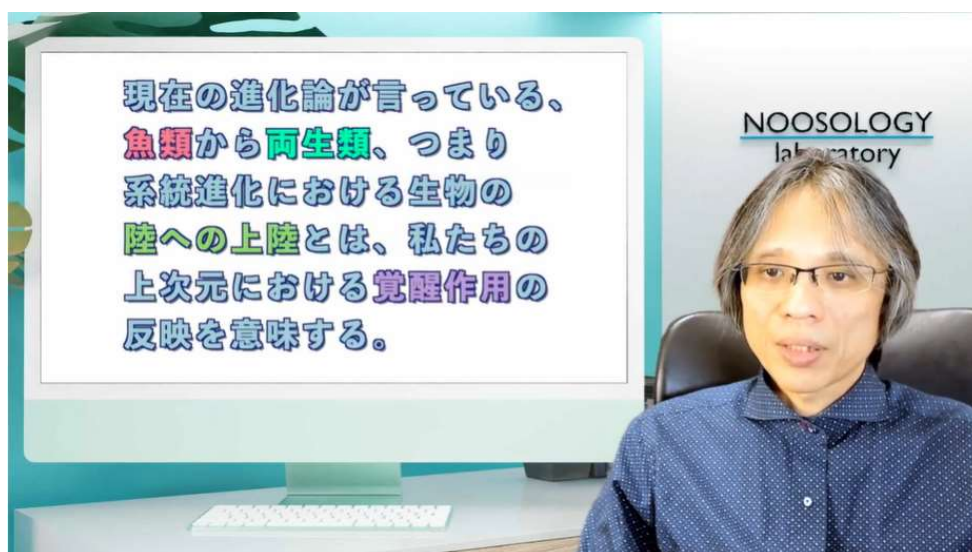
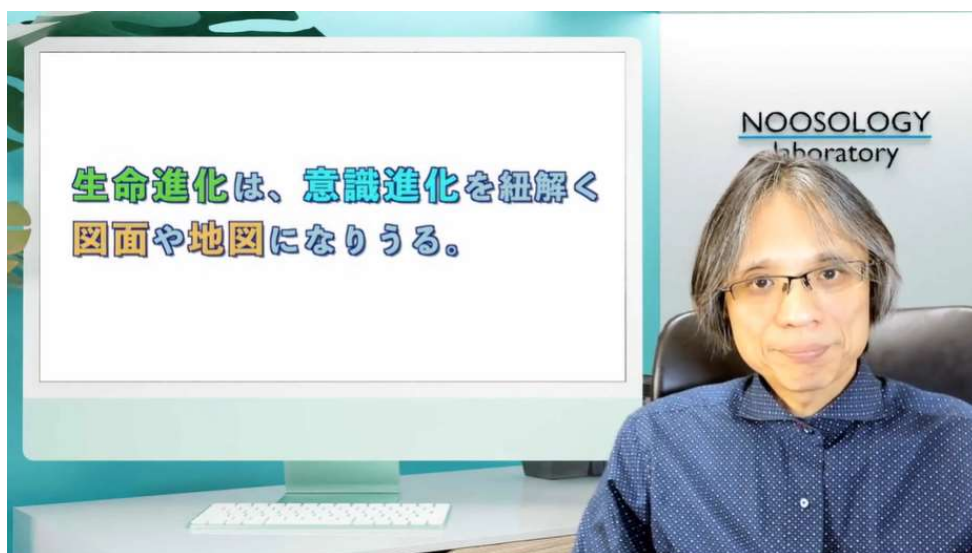
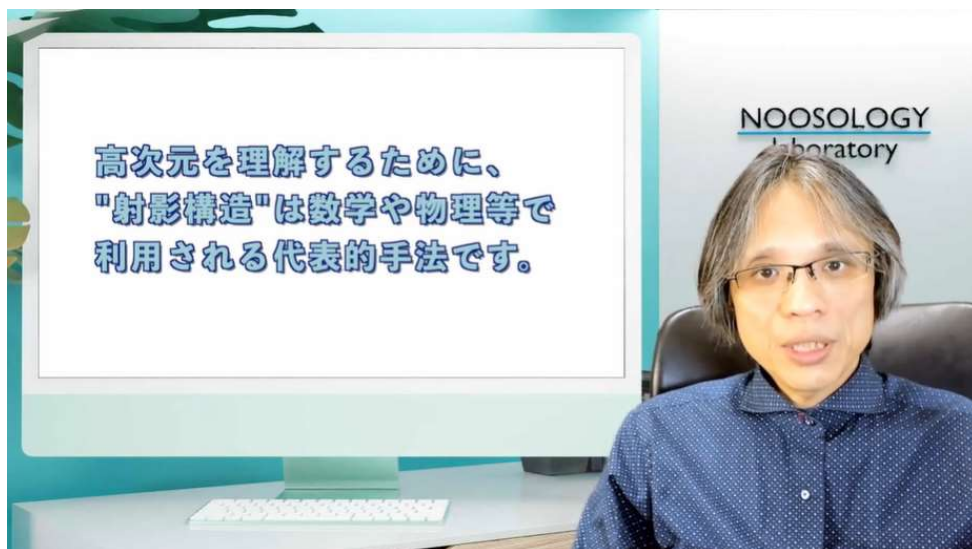
ただ客観空間の認識体系である科学では、それを直接扱えないのです。こうしたことが科学的な表現とヌーソロジー的な表現の矛盾として現れているのではないかと私は考えました。ヌーソロジーは客観空間と主観空間の差異を重視し、外面に存在を見い出します。その意味では客観空間の中だけに描写された対象をある、もしくは、いると表現できないというのは理解できるのではないのでしょうか。これは恐竜との存在と同様に直接計測不能な何億年という壮大なタームのマクロの時間にも当てはまることになります。

このように存在論的な捉え方をしていくと、いないというの意味がはっきりしてきて、時間概念というものも変容してくると思います。恐竜や生物進化そのものは存在論的視点においては、別な有り様として、存在の中に脈動しているということになります。それがどういったことなのか、今度は具体的な例を見ていきましょう。



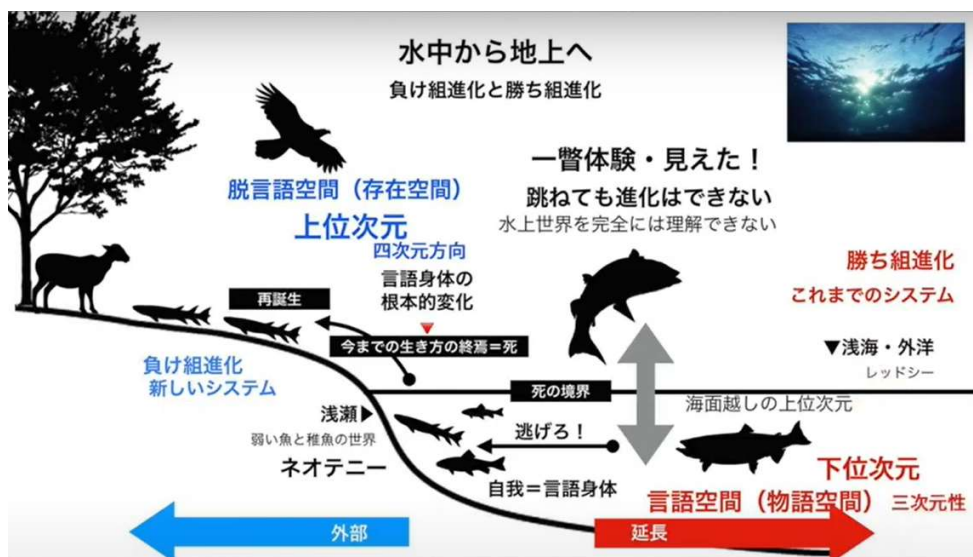
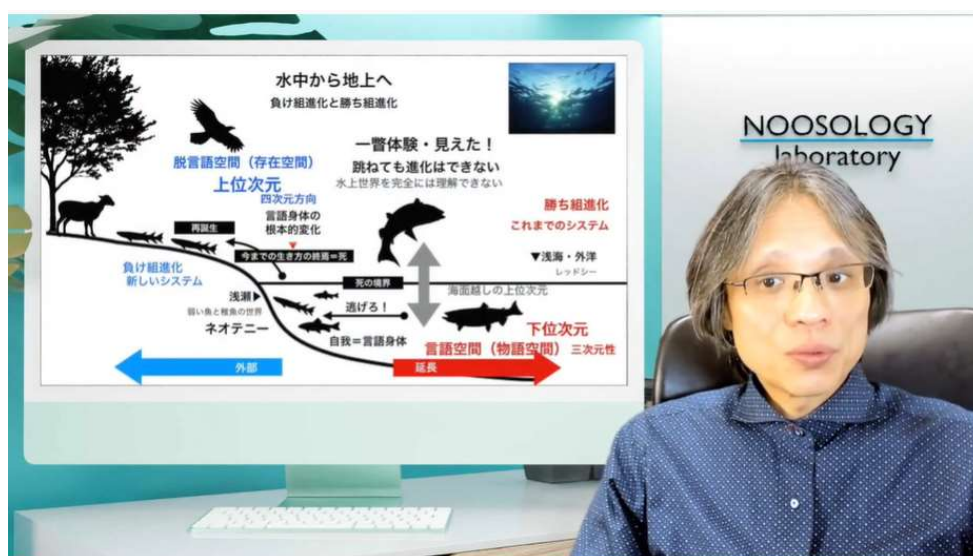
進化論が説く物質進化としての生命進化の履歴は、すべて意識進化のプロセスの影のようなもの。これは端的に言って科学的な生物進化が意識進化の射影構造だということを意味しているでしょう。射影構造です。もしも生物進化がそれ自体根本的に存在しないのであれば、生命進化の履歴や意識進化のプロセスがその影とはなり得ませんね。履歴がプロセスの影とは、つまり、構造や変化していくパターンが一致した形として表れているということを意味するでしょう。影というと、日陰ものじゃないですけど、何かネガティブなイメージを持つ人もいらっしゃるかもしれませんが、私たちが当時のイメージをつかみ取ろうとすると、重要な視点がこの射影構造になります。

4次元や5次元といった高次元は、私たちは直接扱うことができません。ですから、数学や物理の世界では、実際にやられるんですけども、2次元や3次元に現れる高次の射影から考えていくという手法が採られています。いわば2次元平面である紙に、3次元の展開図や図面を描くようなものと言っていいかもしれません。射影関係であるということは、生物進化は意識進化を紐解いていく図面みたいなものということができないでしょうか。



さらに、ヌーソロジーにはこんな具体的な表現もあります。現在の進化論が言っている魚類から両生類、つまり、系統進化における生物の陸への上陸とは私たちの上次元における覚醒作用の反映を意味する。これ、面白くないですか？ 進化論の魚が陸に上がって両生類となっていく様子が、上位次元の覚醒の反映だとヌーソロジーでは捉えるんですよ。

私がアニマダラと名付けている活動の方で、実際に魚が陸に上がっていく進化のプロセスを生物の主観的な環世界と、そこに展開して広がっていく空間構造として捉え直してみたことがあるんですが、そうすると水中と地上は別次元の断層と見なすことができました。

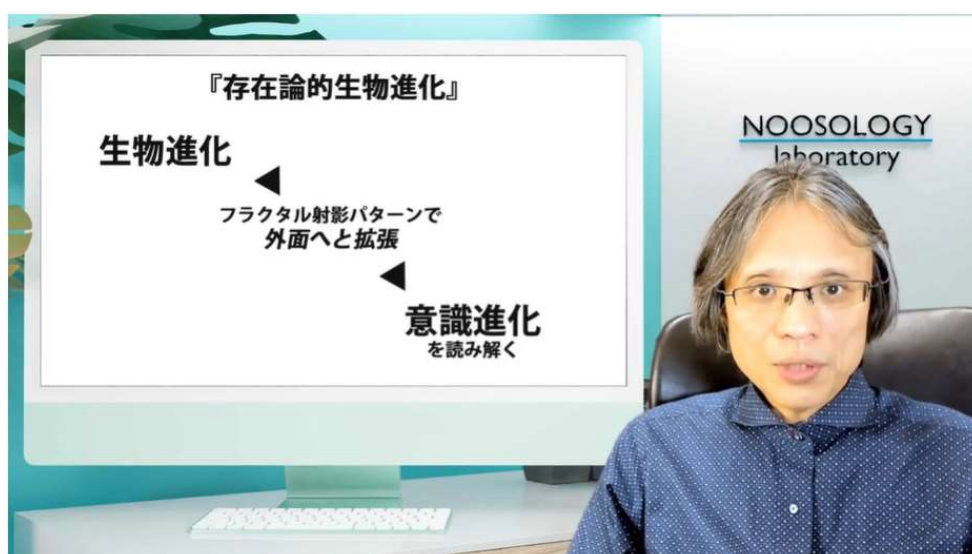


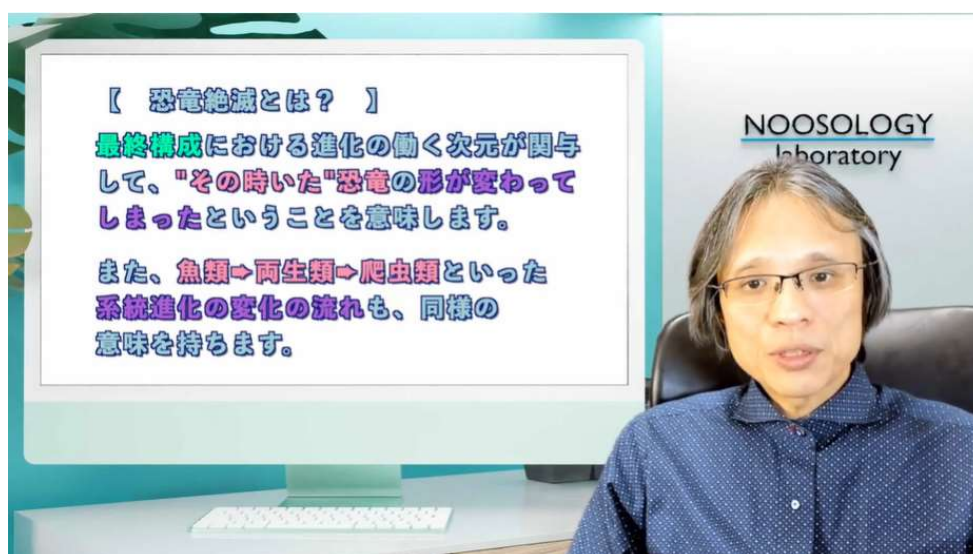
これだけで 1 本研究発表ができてしまうようなテーマなんですけども、そうやって考えてみると、意識が次元上昇するというのが、どういうことを意味しているのか、その生き生きとした構造イメージを見い出すこともできるんですね。



で、あのヌーソロジーでは、アフリカ先住民のドゴン族の神話と共通性がしばしば語られるんですが、そこに出て来る変換人の象徴ともなっている両生類の姿をした神ノンモ、それと、両生類への生物進化が一つに重なっていきます。ヌーソロジー的思考をすると、生物進化と神話がクロスオーバーするような情景が広がっていくんですね。

このように見ていくと、内面側で恐竜や生物進化として語られる事象が存在論的な外面認識が立ち上がっていくと、変容して意識進化として本質が露わになる、そういった解釈もすることが可能でしょう。ヌーソロジーは科学が紐解く対象・事象の構造パターンについては、量子論を始めとしてとても重視しています。しかし、反面、客観空間の思考である科学認識だけでは、知覚正面を見失って、外面側の存在論的側面をつかむことが、少なくとも現在できていないようです。存在論的な生物進化、今回のテーマですね。





存在論的な生物進化とは、そのような考え方から、生物進化というテーマをフラクタルなパターンから外面へと拡張して、その本質から新しい生命・人間観を捉え直すといったアプローチとなります。

さて、さらに、それでは別の例も見ていきましょう。ヌーソロジーでは、恐竜絶滅の原因をこのように述べています。

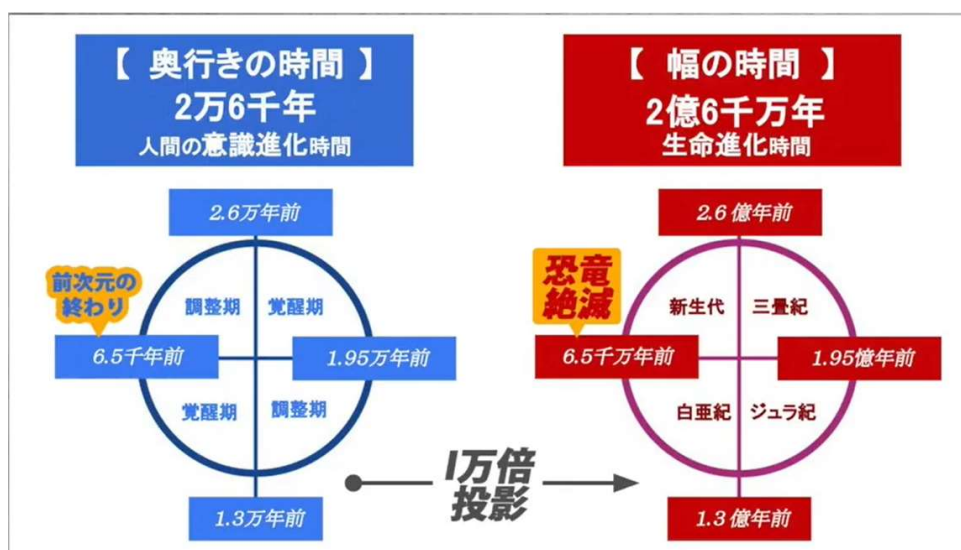
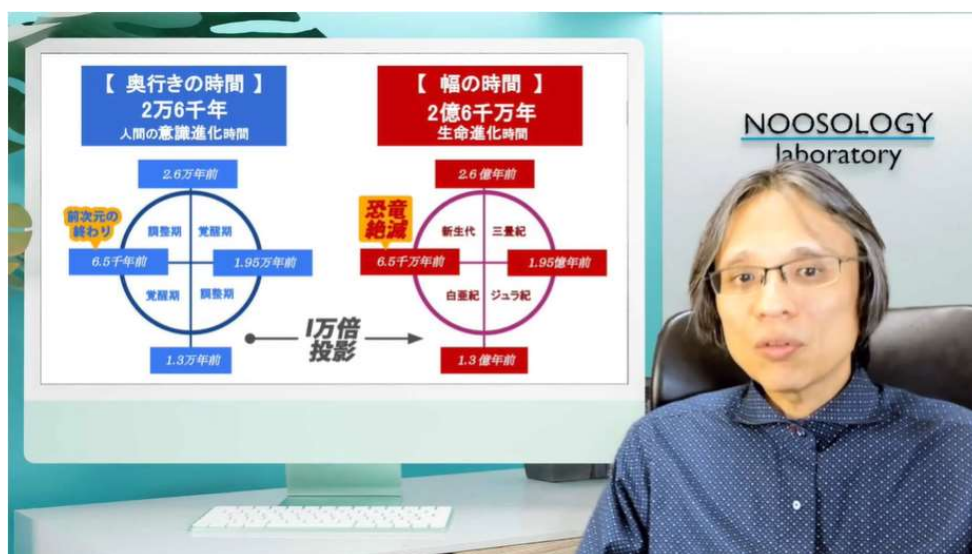
恐竜の絶滅とは、最終構成における進化の働く次元が関与して、その時いた恐竜の形が変わってしまったということを意味します。また、魚類→両生類→爬虫類といった系統進化の変化の流れも、同様の意味を持ちます。

その時いた恐竜の形が変わるという表現がありますから、やはり恐竜が本質的に存在してなかったら、こういった言い回しは成立しませんね。ただこの恐竜はもちろん存在論的な恐竜ということになるでしょう。

ここで注目したいのは恐竜絶滅の原因が最終構成における進化の働きだということです。これは、今の私たちにとって、特に重要ではないでしょうか。なぜなら、今が最終構成だからです。これが意味することは、これから意識進化によって、私たちの精神が変容していくということ。これが、生物進化で恐竜が減ったり生物が別の系統、種へと進化して形を変えていく。これが存在論的には一つに重なっているということになるでしょう。つまり、恐竜やその後に反映していく哺乳類や鳥類の姿の中に、現代人のこれまでとこれからの意識のありようの変化というものを見い出すことができるようになるというわけですね。

まあ、すごい面白い思想ですね。面白いですね。そして、このような認識空間においては、客観的なもう壮大なマクロな時間は、逆流して、今にシュッと畳み込まれて、恐竜絶滅という現象は今こ

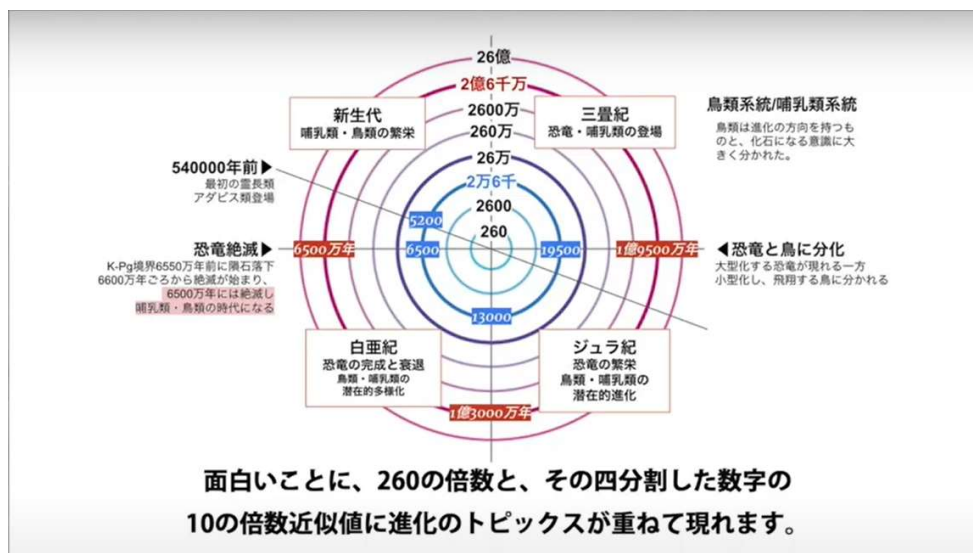
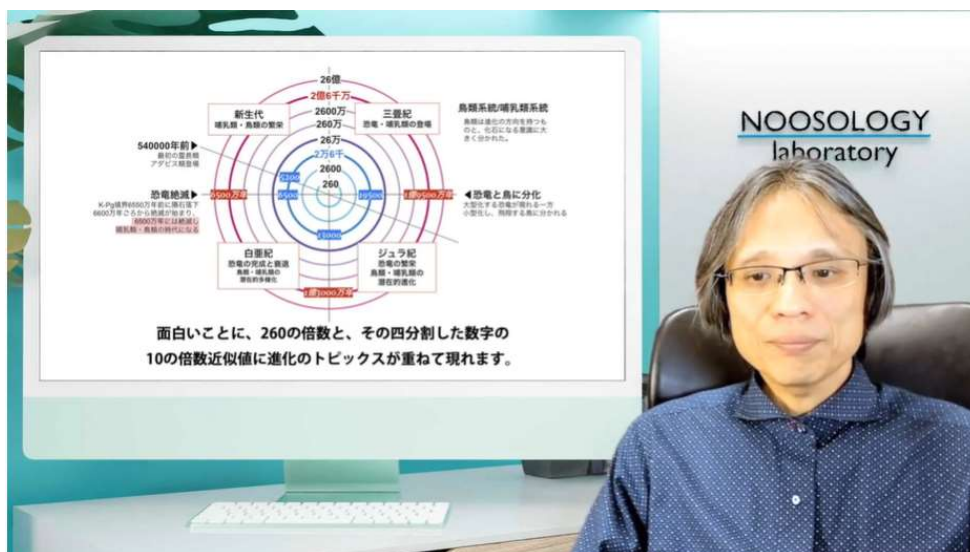
ここで起こるものに変換されていきます。もはや数億年という時間は、意味を喪失していくことでしょう。また生物進化と意識進化がこのような関係性であるならば、それらは異なる時間ターム、サイクルの射影となっていますから、これが本質を表しているならば何らかの形で時間的なフラクタルパターンの一致を確認できると考えられます。それができたならば、ヌーソロジー特有の時間的な解釈と科学的な時間解釈、その双方に橋を渡すことができそうです。そのような発想から生物進化における時間的変遷とヌーソロジーの意識進化における変遷のパターンを実際に確認してみたいと思います。



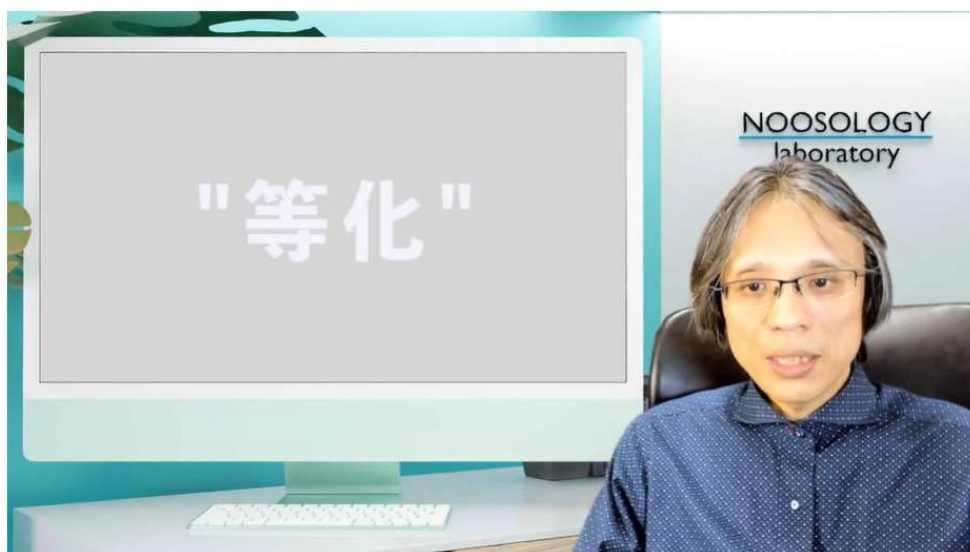
26,000 年を意識進化の一サイクルと見なしているんですが、それをちょうど面白いことに 1 万倍した 2 億 6,000 万年という生物進化の大きな周期と構造変化のパターンのどうも見事に重なることができるようです。これはまた細かいことについては、また改めて別の研究発表動画でお話できたらと思うんですが、どうやらヌーソロジーが語る意識進化と生物進化は時間の対数的なフラクタルパターンとして一致を見い出すことができるようです。

このことから生物進化は内面認識では、壮大な数億年というタームの生物進化として、ベルクソン風に言えば、間延びした時間の中に投影されていて、一方で外面側では、私たちの意識進化の過程として、数万年というサイクルにシュッとフラクタルに縮み込んでいると表現することができるのではないかなと考えます。

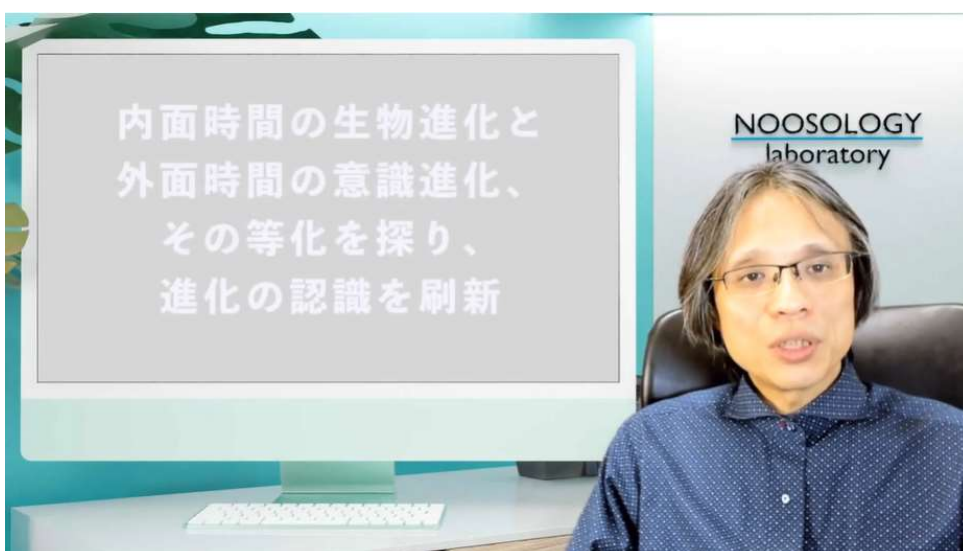
こうした認識自体が立ち上がっていくと、必然的に時間や対象認識というものが変わってきます。これ自体がニューロロジーが語る4次元認識や持続へ参入する意識の働きの一つのアプローチになるのではないかと私は考えました。



また一方で、ヌーソロジーには幅と奥行きの両者に差異を持ちながら同じ構造を見い出す。それを「等化」と呼びます。



で、この等化というものが、4次元方向の認識を立ち上げる意識の働きということになっています。



意識進化は奥行き側の認識になりますし、それから生物進化は幅側の認識ということになりますから、この両者を等化することがもしできたなら、それ自体が4次元的思想の産物なんていることでもできるでしょう。

西洋では生物学的な進化論とキリスト教的な創造論の対立が長年ずっとへ根強くあります。ヌーソロジーを背景とした存在論的進化は、その対立構造の外側に、その対立構造には載っからずに軽々と発想を転換して立ち上がる新しい生物進化の概念と言えるのではないかなと思っています。

以上が、ヌーソロジーで思考する存在論的生物進化でした。

それではまた、次の研究発表でお会いできたらと思います。失礼致します。

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#010(天海)(23:20)
「ヌーソロジーで思考する・存在論的生物進化」(2022/07/26 uploaded)

**Research
Announcements**
#010

ヌーソロジーで思考する・存在論的生物進化



武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer 天海 ヒロ

(出典:【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#010(天海)

(2022/07/27 uploaded)

https://www.youtube.com/watch?v=2GW_24sFfcc)